

松代藩の食事記録にみる上流階層の食事構造（2）  
一行事・儀礼食と日常食のちがいを中心に—  
東京家政学院大

江原 絢子

【目的】日常食と儀礼・行事食、季節、地域、階層などにより異なる近代・近世の食事内容は少しずつ明らかにされているものの、同一地域、同一階層において、日常や行事・儀礼などを含めた日々の暮らしにおける食事構造の全体を把握することは史料の制約があつてか明らかにされることが少ない。本発表では、信濃松代藩御用商人八田家に残された食事記録が、10ヶ月間の行事食などを含めた毎日の食事記録であることに注目し、すでに報告した日常食に加え、行事・儀礼食の食事構造の特徴を明らかにするとともに、既報告の際には明確にできなかった史料の位置づけを明確にしたい。

【方法】松代藩御用商人八田家に残された寛政12（1800）年11月から享和元（1801）年8月までの「御膳日記」を中心に、真田家の「家老日記」「江戸御目付日記」「御膳番日記」「御側御納戸日記」などを用いた。

【結果】「御膳日記」は、御用商人の家に残されていたものの、その内容を松代藩真田家の史料と比較してみると、寛政10年に藩主を退任した江戸中屋敷における真田幸弘とその夫人への食事記録であることが明らかとなった。また、10ヶ月294日、882回分の食事記録のうち、92%はいわゆる日常食と思われる食事献立で特別な食事献立の比率はきわめて少ない。残る食事記録は、煤払い、年忘御祝、正月、七草、3月、5月、7月の節句、8月の月見など行事食、誕生日、来客、上屋敷や菩提寺への外出先での食事が主なものであり、行事食のうち、正月の食事は規式に従った式三献、本膳が供され、日常の来客には、日常の献立に加えて酒肴が供されていた。